福永武彦 『忘却の河』と1960年代の純愛ブームとの比較

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学人文科学研究所 公開日: 2019-07-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 木下, 幸太 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/20221

明治大学人文科学研究所紀要　第八十四冊（二〇一九年三月三十一日）縦　四十五―五十七頁

福永武彦『忘却の河』と1960年代の純愛ブームとの比較

木下幸太

Comparison of Takehiko Fukunaga's *Boukyaku no Kawa* and *jun-ai* boom in 1960's.

KINOSHITA Kota

The purpose of this paper is to illustrate how imagination was defined by the literature of it's time.

Previous research portrays Takehiko Fukunaga's *Boukyaku no Kawa* (The Lethe) as a polyphonic novel and questions its universal theme of life, love and sin. However, it has overlooked the problem that *Boukyaku no Kawa* shows suicide of past lovers as a "love story". Therefore, this paper argues, that *Boukyaku no Kawa* is a self-affirming story of the protagonist "Fujishiro" and a monologue text to construct "Fujishiro's identity".

Takehiko Fukunaga, the author of *Boukyaku no Kawa* created works, which readers of that particular time expected to read. For that reason, this paper focus on the story type called *jun-ai* (In this context, *jun-ai* include pure love, pure relationship, and it is based on emotional intimacy without any physical contacts) which was a trend at the same time as *Boukyaku no Kawa* Michiko Ôshima and Makoto Kôno's *Ai to Shi wo mitsumete* (Staring at Love and Death) was also published in December 1963, at the same time as *Boukyaku no Kawa*. During Japan' high growth period in 1964, this book became a best seller with over one million copies, causing a *jun-ai* boom.

The characteristic of a jun-ai story is to build an identity that is accepted by those intimately close to them despite their awareness of their irrationality. *Boukyaku no Kawa* tried to represent an identity through *jun-ai*, as a contemporary romance in the 1960's, not a guilty conscience due to past unfortunate events.

In general, the story of *jun-ai* is about overcome misfortune, obstacles and conflict inspire readers' emotions. It must pay attention to the *jun-ai* story, such as acceptance of unreasonable circumstances and dedicate attitude toward lover, to play a part in the formation of romantic love ideology.

As previous research has examined, certainly *Boukyaku no Kawa* can be read like any story of the universal theme "How to live life". However, this paper highlights a different aspect, namely this story connects with the contemporary context of how to live in a society which developed rapidly and encompassed irrationality. Also it aims to prove that *Boukyaku no Kawa* shows the methods and problems of telling and constructing the identity of *jun-ai*. Even in modern times, the story type of *jun-ai* is aimed at self-approval by talking about intimate two-part relationships of being loved. Thus, this paper concludes that the story type of *Boukyaku no Kawa* is important considering the problem of identity in the modern age from 1960, which is known as Japan's high-growth period.

《公募論文》

福永武彦『忘却の河』と1960年代の純愛ブームとの比較

木下幸太

一、問題設定

『忘却の河』（一九六三・三～五）[1]は『草の花』に並んで永く読まれてきた福永武彦の長編小説である。

この小説は「藤代家」という家族たちが過去を問い直すことで、アイデンティティを再構築する物語である。「藤代家」の人間は他人に明かせない秘密や不安がある。「藤代」は養家に引き取られた経歴を持つが幼少期に実母から愛されなかったのではないかという不安、自身の不誠実が原因で過去の恋人が自殺したこと、友人が戦死した戦争時の体験などから生じた複合的な罪障意識が現在のアイデンティティを不安定にする。また、「藤代」の妻である「ゆき」は病床で、「藤代」が不在であった戦争中に「呉」という若い男との恋愛を想起する。そして、二人の娘「美佐子」と「香代子」は藤代家の人間ではなく、本当の親が別にいるのではないか、藤代家の親から愛されているのかといった不安を語る。これらの問題が各当事者の視点から語られ、最終的に一つの結末へと収斂する群像小説となっている。

登場人物たちの半生についての葛藤が語られるため、『忘却の河』は人の生にかかわる抽象的な主題を扱った物語であると、これまで評されてきた。たとえば、篠田一士[2]は「人生いかに生くべきか、あるいは、人生とはなにか、という問題を烈しく問いかけることになる」と述べる。

また、先行研究は福永武彦の諸テクストに散見される〈愛〉や〈死〉といった観念が主題となっていることを[3]『忘却の河』にも見出す。たとえば、栗坪良樹[4]は「この大きな告白の流れの主題とするところは、他に対しては〈愛〉であり、自らに対しては〈死〉である」と評し、首藤基澄[5]は、第一章では「恋愛を原体験とした者の罪の意識が執拗に追求され」、第七章では「現実に足を踏まえた認識の主体を形成している」[6]と述べる。近年の研究でも栗坪や首藤の枠組みは踏襲される。[7]西岡亜紀[8]は「過去をありのままに引き受けることによって罪に向き合い本質的な意味での贖いを見出し、ゆるしの出発点を見出し」ていると述べる。言い換えれば、〈忘却／記憶〉という枠組みで「藤代」がいかにアイデンティティをどう確認するのかという問いに直面する物語として了解されていた。

『忘却の河』の特徴は「藤代」個人と藤代家のアイデンティティを同時に再確認することだ。抽象的な主題で執筆するにあたり、福永武彦

の後記[9]では「各章が主人公を異にし従って視点も異にするが、全編を通じて主題は時間と共に徐々に進展する」「連作的な長編」に仕上げようとしたと述べる。最終章である第七章において「藤代」は、これまで作中で語り続けた過去の出来事の記憶に折り合いをつけ、家族との和解を果たすことになる。ここでの和解、つまり家族間における情緒的紐帯（＝絆）の再確認は、「藤代」が自身のトラウマ的な記憶を語り直すことで可能となる。つまり、「藤代」のアイデンティティ確立の物語が主軸として語られ、副次的に家族同士の絆を再発見し、ファミリーアイデンティティを再確認する物語が組み込まれる。

先行研究が検討したように、確かに主題とそれを展開させるテクストの構成は計算されたもの[10]であるが、本論では先行研究が称賛する高い〈構築性〉とそれから生じるテクストの有する読みの〈志向性〉に注意する。

そもそも、評価された構築性の高さは、そのまま批判の理由になる。たとえば、林房雄[11]の「念の入った小説にはちがいないが出来すぎた推理小説めいて、結論を無理やり押しつけられた読後感がのこる」という指摘や、谷長茂[12]の「お膳立てが類型的なのに失望した」、「何もかも書きこんだ模範解答のような作品」という指摘は第一章へのものだが、全体を通して「結論を無理やり押しつけられた読後感」は生じる。

二つの例を挙げよう。まず、第七章での「藤代」とその娘「香代子」が和解する場面を確認する。終始「香代子」に取りついた実父が「藤代」ではないのではないかという不安は、「藤代」の一言で解消される。

馬鹿だなあお前は、と言って私は笑い出した。まったく馬鹿者だよ。お前の顔を鏡でよく見て御覧。お前は確かに母親似だが、そのおでこのところとか、顎のしゃくれているところなんか、私にそっくりじゃないか。香代子も釣られて笑い出した。鏡はしょっちゅう見ます、でもパパみたいに変な顔じゃないわよ。

私と香代子との間は、このようなやりとりがあってから眼に見えて親しくなった。

はたして、「香代子」は本当に「藤代」の娘なのかはテクストからは分からない。両者の関係は引用のように、「藤代」の言葉が想像的に保障するに過ぎない。次に引用する場面も同じく想像的な関係を保障する場面だ。過去の恋人「看護婦」の自殺という出来事に囚われている「藤代」が解釈を変える。

あの頂きに立って、今この世から別れて行くと決心した時に、彼女の意識のなかにどのような面影が浮んだだろうか。あのやさしい娘は最後に何と叫んだのだろうか。私はそれを知らない。私はそれを永遠に知ることはない。断崖の頂きにあって、彼は恐怖に怯え、身をすさって逃れ去った。彼は眼の下はるかに渦巻く怒濤を見て、自分がとうてい飛び込むことの出来ない臆病者であることを知った。しかし彼女は死ぬことによって彼女の愛を証明した。

（傍線引用者、以下同様）

この「看護婦」の自殺に対する解釈には注意したい。なぜなら、作中では「看護婦」の母からの「身籠ったのを恥じた」（第一章）ことによって飛び降りたという伝聞でしか「藤代」は事情を察しえない。

そもそも、第七章の「藤代」の語りでは自殺を巡って矛盾が生じて

いる。先の引用の以前に「香代子」が失踪し、どこかで自殺を図るのではないかと「藤代」が憂慮する場面がある。

人は確かな原因があるから自殺するとは限らない。人は時々、自分で自分を殺したくなるような気味の悪い誘惑に駆られることがある。しかも香代子の場合、原因がないと言い切れるだろうか。人はみなそれぞれに何等かの原因を隠し持っているかもしれず、香代子にしてもあの子だけの原因を持っていないとは限らないのだ。

このように、『忘却の河』は自殺という出来事を当事者にしか〈意味は語れない〉とも、〈愛を証明した物語〉とも語るという矛盾が生じる。

このような矛盾からは『忘却の河』というテクストには、「藤代」の語りを通して表象したい物語と、語らずに忘却したい物語との選別がなされていると想定できる。

つまり、『忘却の河』には〈愛の物語〉と読ませる志向性がある。高い構築性によって、家族や他者との親密性（＝愛）の物語を表象する一方で、具体的な事物の描写なしに登場人物の想像力で謎の解明を行うなど、具体性を欠いて結末へ向かうため「結論を無理やり押しつけられた読後感」が生じる。要するに『忘却の河』は結論ありきの展開をするテクストになっており、「藤代」は過去を〈愛の物語〉として語り直したために矛盾が生じるのだ。

『忘却の河』の高い〈構築性〉と〈志向性〉によって、矛盾があるにもかかわらず他者の〈死の出来事〉を〈愛の物語〉として表象することを先行研究は看過する。この看過はおそらく、テクストの戦略的な形式だけではなく、物語が援用する想像力によって可能となる。これまで、『忘却の河』と先行研究はある想像力を共有してきたことで、〈構築性〉の矛盾を看過し得たのではないか。

ならば、『忘却の河』は〈愛の物語〉をどのようにして表象するのか。本論では一九六〇年代、どのように文学テクストにおいて〈愛〉という想像力が活用されたのか、『忘却の河』を例にして考察する。

二、〈父〉の物語をめぐって

そもそも、なぜ『忘却の河』で「藤代」はアイデンティティを問うのか。これまでの批評を確認すると『忘却の河』のようにアイデンティティを問うテクストが同時期に多く発表されたことが分かる。

一九六〇年代において、文学テクストの登場人物がアイデンティティを確認する際に参照するはずの〈超越的価値基準〉の崩壊が指摘される。その一例として〈家〉の機能不全が挙げられる。江藤淳『成熟と喪失』[13]では『忘却の河』と同時期の小説である安岡章太郎「海辺の光景」（『群像』・一九五九）、小島信夫『抱擁家族』（『群像』・一九六五）などから〈家族〉の機能不全を指摘する。成熟を拒否し擬似的な母子密着を妻に求めることができない戦後日本の状況を江藤は批評し、敗戦後の「近代日本における「母」のイメイジの増大は、おそらく「父」のイメイジの稀薄化と逆比例している」と述べる。息子にとって「母」とは「自然」＝帰るべき場所＝「家」のイメージである。この「母」との密着は、息子が成熟した後、個人形成のモデルとして想定される「父」のイメージの稀薄化の裏返した結果だ。

江藤の批評を踏まえ、佐藤泉[14]は敗戦後とは「帰属するべき全体を失った個が寄る辺なく漂流することになる時代であり、これは容易に

全体・秩序の再構築の語りを引き寄せる」と述べる。この議論を踏まえれば、『忘却の河』は「藤代」という〈父〉が〈家族〉という「全体・秩序の再構築の語り」を行っていると言える。というのも、「藤代」は語り手のなかで唯一、手記形式で語るからだ。次の引用部は『忘却の河』第一章の冒頭である。

私がこれを書くのはこの部屋にいるからであり、ここにいて私が何かを発見したからである。その発見したものが何であるか、私の過去であるか、私の生き方であるか、私の運命であるか、それは私には分からない。ひょっとしたら私は物語を発見したのかもしれないが、物語というものは人がそれを書くことによってのみ完成するのだろう。（……）私はどういう人間なのだろうか。他人からどのように見られているのだろうか。

「〜だろうか」と問いを示すように語ることでテクストがこの後どのような主題を展開するのかを読者に予期させる。それはまさしく「私はどういう人間なのだろうか」というアイデンティティの探求に他ならない。

また、「私がこれを書くのは〜」という一文は最終章である第七章の冒頭でも反復されており、物語終盤で改めて読者を「藤代」や彼の語る問題意識に重ねようとする修辞が施されている。この手記形式での語りを、単なる一人称として考えれば、他の人物の語りと差異はない。しかし、語りの形式の問題ではなく、〈物語を書く〉という行為が物語に書き込まれていると考えれば、これは物語内容の問題なのだ。ときには過去の出来事へ逡巡を交えながらも解釈してゆく「藤代」は過去の出来事を配置し、共通する主題のもとで物語として構成する。「私がこれを書くのは〜」から始まる「藤代」の書記行為の身振りと、その身振りによって語ろうとする「藤代」の半生への問いは不可分のものである。書こうと試みる「これ」＝〈物語〉こそが「藤代」の問いの答えとなっており、物語の完成（「藤代」が語る第一章、第七章が語り終わること）が問いの解明に重ねられる。そのため、『忘却の河』というテクストを語り終わること（読者が読み終えることと言っても良い）が、「藤代」という人物を同定するための彼の「物語」の発見と重ねられる。

「藤代」が同定しようと試みるアイデンティティとは〈語る現在の自分自身〉である。本論一節で述べたように「藤代」の〈個人〉と〈家族〉のアイデンティティが同時に確定されることを踏まえれば、語る現在の「藤代」自身とは、「藤代」個人であると同時に、語る現在において自身が構成している家族の世帯主＝〈父〉である「藤代」だ。

この二重のアイデンティティの同定は、同時並行で行われるため、単に「藤代」が個人的に自己の半生を語り直すだけでは達成できない。複数の個人から成る〈家族〉のアイデンティティを同定するには、当然〈父〉だけではなく〈子〉など、その他の構成員同士での承認が必要だ。

「藤代」が自らのアイデンティティを同定しようとする語りを「物語」と称すことは、その「物語」を語る過程において他の登場人物たちを「藤代」の家族の構成員として承認し、一つの秩序・物語の下に組み込もうとする「藤代」自身へのメタフィクショナルな言及とも解釈できる。

一見すると、複数人の登場人物が各章で語るためにポリフォニックな構成のテクストのようであるが、その実、『忘却の河』は一貫して「藤代」の「物語」のために登場人物を配置する。「藤代」の家族たち

も個人的葛藤を語るが、それは〈父〉によって解決されることで、〈私たちは家族である〉というメタメッセージしか示さない。

『忘却の河』は〈妻〉や〈娘〉、そして過去の〈恋人〉などの声によって基礎づけられた「藤代」という〈父〉・〈男〉が「物語」を語るモノローグである。〈父〉が権威（authority）として機能しない戦後において、〈父〉の位置に立てるのは書き手（author）として、ある秩序を語ることによる。「藤代」は〈父〉としてのアイデンティティを確立するために、〈私たちは家族である〉という物語＝秩序を再構成しなければならない。

三、〈愛〉と〈死〉の物語

では、〈個人〉と〈家族〉というアイデンティティの再構成に、なぜ〈愛〉が用いられるのだろうか。『忘却の河』が発表されるまでの状況を確認しよう。福永武彦は『忘却の河』を発表するまで、いくつかの中・短編小説を発表したものの、長編小説は『草の花』（新潮社・一九五四）のみで『忘却の河』を発表するまでの約一〇年間書けずに苦心していた。『忘却の河』発表までの状況については首藤基澄が詳しく紹介している。[15] 首藤によれば『草の花』は同時期に発表された三島由紀夫『潮騒』の注目に追いやられる形で、あまり注目されなかった。福永武彦は「私の作品は大して注目されることもなく、意気銷沈せざるを得なかった。というのは後に述べるように私は殆ど背水の陣を布いてこの作品に取り組んだからだが、しかしそのためにもう一度陣形を立て直して次の作品に励んだということもあっただろう」[16]と、『草の花』の注目度の低さと「次の作品」への意気込みを述べる。『草の花』以後の短編では「廃市」（一九六〇）などを発表したが、長編は『夢の輪』[17]や『死の島』[18]などの途絶もしくは長期間の休止を経て『忘却の河』以後に執筆されることとなる。

『忘却の河』の執筆までに多くの失敗があったことを踏まえれば、それをクリアするような方法が『忘却の河』でなされていると考えられる。その方法の一部には物語の構想、同時代の読者の関心を集める方法の模索がある。たとえば、首藤は『忘却の河』の方法論について「昭和三十年代の日本人を把握する」ために、戦争体験、関東大震災、転向問題を挙げ、それらの体験が恋愛の問題へと収束し「現代史という枠組みの中で、恋愛で蘇生し傷ついた人間の実存が、つまり恋愛を原体験とした者の罪の意識が執拗に追求されているのである」と述べる。発表当時の読者をテクストが想定するならば、同時に当時の文化も反映していると考えられるだろう。

実際、福永武彦は制作の際に同時代の読者がどのような想像力を有し、いかにすれば読者の情動的反応を触発しうるのかを想定して文学テクストを構成していた。[19]『忘却の河』と同時期の小説論「私の小説作法」[20]で、福永武彦は「読者の想像力」が加わることで「小説の描き出そうと試みた世界が完結するというふうにありたい」と述べる。「小説の技術」が読者の想像力に働きかけることで「否應なしに作者の世界に連れ込むほどに強力」で「作者と作中人物と読者」とが「三位一体」となるような関係が望ましい。その場合「単に小説家の主題がどうとか、作中人物の生きかたがどうとかということではなく、読者が能動的に作品を受け入れるための小説的方法が問題になる」と、小説の方法論と主題との不可分性を述べる。

この小説論を鑑みれば、「昭和三十年代の日本人」とりわけ作中の「藤代」と同世代[21]を捉えるために、戦争体験、関東大震災、転向問題などの話題が『忘却の河』に採用されたことも頷ける。そして同時代

の読者のために物語の話題を選択していたのであれば、それらの話題を包含した物語全体の主題である〈愛〉や〈死〉についても、同時代の文脈を想定したのではないか。この仮定の補助線として、『忘却の河』と同時期に起きた〈純愛〉ブームを参照する。

『忘却の河』が雑誌に発表された一九六三年の十二月には大島みち子・河野実『愛と死をみつめて　ある純愛の記録』が出版され、六四年には一〇〇万部を超えるベストセラーになり、〈純愛〉ブームが起きる。毎日新聞編集『読者世論調査30年』[22]は「〝純愛もの〟に心の救い」という見出しを付けて高度成長の疲弊による需要として説明する。

高度成長は歩調を早め、ひとびとは乗り遅れまいと狂奔した。焦燥と疲労……マイホーム主義が絶好の隠れ家として国民の間に浸透していった。〝純愛もの〟の本も受けた。

わずか21歳で不治の病「軟骨肉腫」のためその命を失った大島みち子とその恋人・河野実の1年にわたる愛の書簡集「愛と死をみつめて」は１９６３（昭和38）年12月に発売されるやまたたく間に１００万部を突破する大ベストセラーとなった。

もちろん、『忘却の河』が『愛と死をみつめて』の模倣であると述べたいのではない。『忘却の河』の各章発表時期と『愛と死をみつめて』の発表時期を比べれば、参照したとは考え難い。それ以上に、愛と死という水準まで抽象度を上げてしまえば、類似するテクストは近代から繰り返し書かれていた。実際、『読者世論調査30年』における『愛と死をみつめて』以前の「よいと思った本・ベスト10」（単に売れただけではなく読者が良いと考えた本）をみると田宮虎彦・田宮千代『愛のかたみ』（五八年・一〇位）、武者小路実篤「愛と死」（五九年・六位）、山口清人・久代「愛と死のかたみ」（六二年・一〇位）など、愛とそれを引き裂く死・病を主題とした小説[23]が好まれ、ブームの下地を生成していた。

ここで指摘したいのは一九六三年に共有された〈純愛〉の現代性だ。一般的に言われる愛とは異なる六〇年代の〈純愛〉とは何か。

〈純愛〉概念には戦後の純潔教育がかかわる。周知のように純潔教育は戦後のセクシュアリティ規範において重要な意味を持つ。簡単に概要を確認しよう。[24]戦後、占領軍の相手をする「パンパン」や赤線地域外の私娼などが問題視され、環境浄化が進められる。この一連として一九四六年一一月一四日に関係各省の次官会議で「私娼の取り締まり並びに発生の防止及び保護対策」が決定。これを根拠に文部省は「純潔教育」を打ち出した。「純潔教育」に関連する法令は敗戦によって荒廃した性道徳と男女共学に代表される戦後の男女関係の指針づくりを担って施行された。

ここでは純潔教育と『愛と死をみつめて』のかかわりだけ確認しておこう。結局のところ純潔教育は青少年の肉体的純潔を守るという旧来の道徳教育と変わらなくなった。だが、純潔教育が用意される要因となった男女平等や男女共学などを背景にして、「恋愛の自由」が到来するという期待が戦後に高まる。恋愛の自由がもたらした状況の一つは一九五五年の石原慎太郎『太陽の季節』、いわゆる〈太陽族ブーム〉が象徴的だ。恋愛論の変遷を考察した菅野聡美[25]の言葉を借りれば、一九五〇年代の〈太陽族ブーム〉のように、恋愛の自由とは「男と女が出会ってセックスすれば恋愛である、というように、恋愛という言葉は空疎なものになった」と言える。この直後に「空疎になりすぎたために、わざわざ「純愛」などと銘打たなければならなくなる」と菅野が述べるように、戦後に生じた〈恋愛〉の空疎化の状況を踏まえて

『愛と死をみつめて』を読んだ時、肉体よりも精神を上位に置く〈純愛〉の特徴が浮き上がる。

まこ、貴方の御手紙を誰かぬすみ読みしたとしたら、私達どう思われるかしら？　どんな深い間柄なのだろうと、きっと思われてよ。でもいいわ。肉体的に結ばれていなくても、心は固く結ばれているのですもの。（……）

マージャンやパチンコ、やりたければやればいいじゃない。もっと面白い遊びがあるのならやればいいわ。そんなことで私の気持が変るほど、そんなちっぽけな愛情でないと自負しています。[26]

マコ、純潔ってどんなこと？　肉体的に純潔であっても精神的に純潔でない人もいるでしょうし、またその逆の人もいると思うのです。結婚前に最愛の人に全てを捧げることは決して不純だと思いません。ただなんとなく道徳上、いけないような気もするのですが。[27]

「ミコ」（大島みち子）は病で床に臥しており大阪で療養中のため、移動の自由がない。そのため、東京の大学生である「マコ」（河野実）とのコミュニケーションは手紙のやり取りといった遠隔的なものとなる。

〈純愛〉はその生成過程で〈苦難〉を必要とする。藤井[28]が「ふたりを隔てる〈距離〉」の重要性を指摘するように、会う・電話など自由にできない状況だからこそ二人の純愛が生成される。さらに言えば、先に紹介した『読者世論調査30年』における「よいと思った本・ベスト10」の田宮虎彦・田宮千代『愛のかたみ』、武者小路実篤『愛と死』、山口清人・久代『愛と死のかたみ』なども同様に、物理的距離や苦難・障害を乗り越えて〈繋がり合うこと〉が二人の深い親密性の証左となる。そして、空間的距離の隔たりや安易に会えない状況のために、精神的接触による愛が称揚される。

愛における肉体性と精神性は両立してもおかしくないが、「ミコ」（大島みち子）の言葉を借りれば「ただなんとなく道徳上、いけないような気もする」と第一に精神性を称揚する恋愛観が内面化される。この内面化の一因として純潔教育を見出すことは可能だろう。

肉体ではなく精神的に不変な愛、〈繋がり合っている〉という相互承認の感覚、これが戦後の純潔教育から育まれた〈純愛〉の内実である。

四、〈罪〉と〈純愛〉

精神性と相互承認を尊ぶ〈純愛〉が『忘却の河』で描かれるのは先行研究でも多く取りあげられる第七章の「藤代」が「看護婦」の声を聞く場面だ。多くの先行研究が引用するこの場面では、罪障意識の原因であった出来事を〈忘却〉せずに〈記憶〉すべきと意識転換するために重要だ。「藤代」が嵐の海に浮かぶ船の中で、「藤代」が抱く罪障意識の原因である「看護婦」の自殺という出来事の記憶と和解する。

彼女の死んだ魂がしきりに私を呼んでいる声が聞えるような気がした。その下ぶくれの寂しげな顔が眼に浮んだ。彼女は言っていた。わたしは嬉しいわ、あなたがまだわたしのことを忘れないでいてくれるということ。みんな不幸なのね。みんな可哀想なのね。でもあなたはわたしのことを決して忘れないわね。

僕は決して忘れないよ、と彼は言った。
僕は決して忘れないよ、と私は言った。

第一章で「看護婦」を喪った出来事を忘れたい記憶と語り、罪障意識や自己否定感を募らせていた「藤代」は、この場面で「看護婦」と想像的な和解を果たす。この和解は生者と死者という空間・物理的隔たりのなかで「忘れない」という精神的繋がりが両者の親密性を保障するために『愛と死を見つめて』のような〈純愛〉が確認できる。

ここで注目したいのは、「看護婦」との出来事が〈罪〉の隠喩から〈純愛〉の隠喩へと変換されることだ。忘れたい罪障意識と、忘れないという純愛意識は、呼称が異なるだけで、指示対象は「看護婦」に象徴された「藤代」にとっての忘れられない記憶であることは変わらない。

本論一節で検討したように「藤代」はトラウマ的記憶となっている「看護婦」の〈自殺〉という出来事を〈愛の証明〉として半ば恣意的に解釈を変更する。自己否定の根拠としてあった出来事を親密な他者から承認される出来事に読み替えるメカニズムがあるために、『忘却の河』で、愛という要素は個人を承認させる機能を有する。

確かに、この引用場面が示す〈罪〉を〈純愛〉へと変えることでアイデンティティを獲得するという物語の構造に対し、先行研究の首藤のように「恋愛を原体験とした者の罪の意識が執拗に追求され」、「現実に足を踏まえた認識の主体を形成している」[29]と解釈することも可能だ。しかし、「看護婦」の自殺を愛の証明という物語として語り直すことへの倫理的批判の欠如。それ以前に、自殺という出来事への二律背反的な言及を看過している。首藤をはじめとした先行研究は、この矛盾への看過によって成り立っているため誤読であると言わざるを得ない。

テクスト内で「藤代」が誤読しなければアイデンティティを獲得できなかったように、先行研究も〈罪〉から〈純愛〉の物語へと変えるダイナミズムに対して、「看護婦」の自殺という出来事の暴力性を看過することで、『忘却の河』が人生を問う普遍的問題を扱った物語であると誤読する。

だが、文学テクストとは常に誤読されるのであれば、間違わずに読むことは重要ではない。重要なのはどのような〈物語〉をテクストに読むか、そしてテクストにどのような〈物語〉を求めるかだ。[30]

『愛と死をみつめて』のような〈純愛〉ブームが高度成長期の疲弊の裏側で生じた事象であるならば、〈純愛〉の物語を虚構に見いだそうとする時代の精神状況との照応が『忘却の河』にも認められるだろう。『忘却の河』の筋のように〈罪〉から〈愛〉の物語へと読み替えるためには、そのための論理的操作や状況・場面設定などが必要であるが、一九六三年前後においてはその解釈変更が行える〈純愛〉という思潮が編成されていた。

また、『忘却の河』が発表された一九六〇年前半は〈純愛〉ブームの時代であると同時にこれまでアイデンティティの認識の枠組みとして機能した〈家〉という秩序の瓦解が顕著に小説に表出する時期でもあった。エディプス構造をベースにしているために、「父」というイメージの稀薄化は秩序の超越的価値基準の瓦解に繋がる。そのため、江藤が『成熟と喪失』で取り上げたテクストのように〈家〉の崩壊と直面によって葛藤が生じる。そして他方で『忘却の河』のように秩序の再構成が試みられたのだ。

五、結論

先に検討した通り、『忘却の河』では〈純愛〉によるアイデンティティの確立が行われる。この点を敷衍すれば、「藤代」は〈父〉として主体形成を行う際には、「藤代家」という秩序の再構成も同時に行うため、作中での〈純愛〉は「家」という秩序を再構成する力としても作用する。見田宗介が[31]『愛と死をみつめて』に対して「不幸の一体感に根をおいた共感はそれだけ深い（傍点原文）」、「人間の力によって解決しなければならない社会的な不合理の犠牲者たちに、おなじような運命の甘受と献身への憧憬を与えるとしたら、それは美しくとも危険だ」と述べるように、不幸や障害、葛藤を乗り越えることで生じる〈純愛〉は当事者をはじめ、それを消費する読者の情動に強く作用する。

しかし、〈純愛〉は論理的にまず乗り越えられるべき不幸や障害を必要とする。高度成長期が生んだ疲弊や不合理によって〈純愛〉ブームが起きたのであれば、読者を共感させるために不幸や障害は物語に要請される。そして、不幸や障害は〈純愛〉物語に情動的作用の強度を与える。難病などを原因として、登場人物を長きに渡り苦しめ、最終的には死を与える筋が散見されるように、〈純愛〉の物語の底流には暴力性が確認できる。[32]

また、不合理な状況の甘受や恋人への献身的態度など、〈純愛〉の物語に示される登場人物の身振りは同時代のロマンティック・ラブ・イデオロギーの形成の一翼を担うことを検討しなければならない。

『忘却の河』というテクストは、一九六〇年代の現代的な恋愛である〈純愛〉という想像力を援用したロマンティックな修辞によって、過去の不幸な出来事による罪障意識に拠らないアイデンティティへ、いわばトラウマティックな〈私〉ではなくロマンティックな〈私〉を語ろうと試みたテクストである。これまでの先行研究が綿密に検討したように、確かに『忘却の河』は〈愛〉や〈罪〉、〈死〉といったモチーフからアイデンティティをいかに形成するのかが問われた。したがって、物語の問いは先の篠田一士の言葉を借りれば「人生いかに生くべきか」という普遍的な問いだけのように受け取られる。

しかしそれだけではない、この問いは急激に発達し、不合理を内包した社会をいかに生きるかという現代的な文脈と接続しているのだ。

高度成長期にブームとなった〈純愛物語〉に特徴的なのは、不合理のなかであっても親密な他者に承認されたという認識に拠って〈私〉を語ること、作り出すことであった。現代でも、この〈純愛〉的な親密な二者関係による〈私〉語りは愛用されている。[33]

『忘却の河』は〈純愛〉という枠組みを用いてアイデンティティ確立を試みる語りとその問題を示す。それゆえ、高度成長期から現代におけるアイデンティティをめぐる問題を検討する際に重要なテクストなのである。

【注】

1　初出　「忘却の河」・『文藝』三月号・一九六三。「煙塵」・『文学界』八月号・同年。「舞台」・『婦人之友』九月号・同年。「夢の通い路」・『小説中央公論』一二月号・同年。「硝子の城」『群像』一一月号・同年。「喪中の人」・『小説新潮』一二月号・同年。「賽の河原」・『文藝』一二月号・同年。
初刊　単行本『忘却の河』・新潮社・一九六四。

2　篠田一士・文庫『忘却の河』解説・新潮文庫・一九六九。

3　たとえば、福永武彦の初長編『風土』（新潮社・一九五二）の帯文には「夢みる男と愛する女の新しいモラルを探った書下し戦愛小説！」と書かれ、『草の花』（新潮社・一九五四）の帯文には「二つの魂の間に果して愛

は可能だらうか――ジイドの「狭き門」に比せられる香り高い長編」と書かれている。福永武彦の死後に刊行された全集の帯文も「孤独と愛と死と藝術を凝視しつづけた福永作品の全貌」と書かれているように「(恋)愛」、「孤独」、「死」というロマンティックな用語で語られることの多い作家であった。

4　栗坪芳樹「作品論 忘却の河」・『国文学 解釈と教材の研究』・學燈社・一九七二。

5　首藤基澄『福永武彦の世界』・審美社・一九七四。

6　同掲書・一一〇頁。

7　この他にも粟津則雄（「『忘却の河』をめぐって」・国文学解釈と鑑賞・一九七七）、佐藤泰正（「福永武彦における主題――その往相と還相」・国文学解釈と教材の研究・一九八〇）、高野斗志美（「『忘却の河』」・国文学解釈と鑑賞・一九八二）、西原千博「『忘却の河』試解――過去の呪縛・言葉の呪縛――」（札幌国語研究、第四号・一九九九）、影山恒男「福永武彦『忘却の河』の構造と意味についての試論」（成城国文学・第九号・成城国文学会・一九九三）、大木良子「福永武彦『忘却の河』論――〈声〉の言葉による浄化――」（山口国文・第一八号・山口大学人文学部国語国文学会・一九九五）が同様の枠組みで読んでいる。

8　西岡亜紀『福永武彦論 「純粋記憶」の生成とボードレール』・東信堂・二〇〇八。

9　「初版後記」・単行本『忘却の河』・新潮社・一九六四。

10　この点は西岡亜紀「『忘却の河』の構造をめぐって：方法と内容の接するところ」、『言語文化と日本語教育』第一五号（お茶の水女子大学日本言語文化学研究会・一九九八）を参照されたい。

11　朝日新聞・一九六三年二月二八日号。

12　図書新聞・一九六三年三月二日号。

13　江藤淳『成熟と喪失――〝母〟の崩壊――』・河出書房新社・一九六七。

14　佐藤泉『戦後批評のメタヒストリー　近代を記憶する場』・青土社・二〇〇五。

15　首藤基澄『福永武彦の世界』（審美社・一九七四）、特に第五章に詳しい。

16　福永武彦「『草の花』遠望」・『草の花』新版・新潮社・一九七二。

17　『婦人之友』一九六〇年一〇月号～一九六一年十二月号に連載。

18　『死の島』は主に『文藝』誌上で一九六六年から一九七一年まで数回の休載を挟みつつ連載された。だが、作中作「カロンの艀」は『文学界』（一一月号・一九五三）に発表された。

19　この見解については、拙論「リアリズムの共犯」（『文学研究論集』四八号・明治大学大学院・二〇一八）を参照されたい。

20　毎日新聞、一九六四年八月九日号掲載。

21　一九六三年当時、「藤代」とほぼ同世代の平野謙（当時五六歳）は「福永武彦の「忘却の河」（文芸）を、私は同情的に読んだ。この作者が意外に古風なセンチメンタリストなのにすこし驚かされるけれど、やはり私は現代小説として、こういう作品を書かずにいられぬ作者に同感する」（「毎日新聞」・一九六三年三月一日号）と評しており、「藤代」と同時代に生きる同世代からの反応の一例として興味深い。

22　毎日新聞社編『読書世論調査30年――戦後日本人の心の軌跡――』・一九七七。

23　同じ機能を近代小説では〈結核〉が担っていた。戦後の実存主義の風潮を含んで『忘却の河』で表象されるに至るまでの〈結核〉の変遷は拙論「結核、その〈出来事〉以後：福永武彦『忘却の河』を視座とした結核表象の変遷」（『文学研究論集』四六号・明治大学大学院・二〇一六）を参照されたい。

24　敗戦直後の性風俗是正に向けた詳しい動向については小山静子ら編『セクシュアリティの戦後史』（京都大学学術出版会・二〇一四）、純潔教育と文学テクストの関わりについては藤井淑禎『純愛の精神史』（新潮選書・一九九四）を参照した。

25　菅野聡美『消費される恋愛論』・青弓社ライブラリー・二〇〇一。

26　「一九六三年二月一三日」・『愛と死をみつめて』・大和書房・一九六三。

27　「一九六三年三月七日」・同書。

28　藤井淑禎・前掲書。

29　注5に同じ。

30　広く述べられる主張だが例としては、ポール・ド・マン「盲目性の修辞学」（『盲目と洞察』・月曜社・二〇一二）が挙げられる。

31　朝日新聞社編『ベストセラー物語　中』・朝日選書・一九七八。

32　現代においても文学やサブカルチャーで女性ジェンダーへの暴力が「泣ける物語」として消費される構図は指摘されている。菅聡子「〈暴力〉の表象／表象の〈暴力〉――欲望の再生産とメディア」・竹村和子編著『欲望・暴力のレジーム：揺らぐ表象／格闘する理論』（作品社・二〇〇八）を参照されたい。

33　斎藤環『承認をめぐる病』（日本評論社・二〇一三）を参照されたい。

※福永武彦のテクストは『福永武彦全集』（新潮社・一九八七）に拠った。なお、本論は日本文学協会第36回研究発表大会（二〇一六年六月二六日、於・岩手県立大学）での口頭発表に基づいている。あらためて、発表の際にご指摘・ご意見をくださった方々に感謝を申し上げます。